

「スポーツ・コンベンション'92」(主催・文部省 / 1月28日・東京)

## 「パークゴルフをとおしてのまちづくり」

北海道中川郡幕別町教育委員会教育長 前原 懿 (C)1992

---

これから私たちの町が8年あまりにわたって取り組んでまいりました「パークゴルフの開発とまちづくり」について発表させていただきます。

はじめに、わが町について少し紹介させていただきます。幕別町は十勝平野のほぼ中央にあり、人口は少しずつではありますが増加をしております、ただ今2万2千人の町であります。

もともと農業が盛んでありますが、町の発展は農業をはじめ地域の資源に関連した二次産業や三次産業などの活性化がなくてはならない状況にあります。気候は四季をとおして晴天の日が多く、したがって雪も比較的少ない所ではありますが、寒暖の差が激しく季節感のはっきりした地域であります。

## ことの始まりは ゴルフへの憧れ

まず、パークゴルフが生まれたきっかけではありますが、それは昭和58年にさかのぼります。私自身の運動不足や好奇心など、あまり大きな声ではいえないような動機に始まります。当時何度かの体験からゴルフへの憧れをもっていたのですが、なかなか機会がつかれない、と言うよりはお金がつかれないと言ったほうが正しいのかもしれませんが。

そんな時、教育委員会勤務となりまして、その頃、自分も楽しめるスポーツを作ることができないものかと思うようになりました。考えてみれば、自分の好奇心を満たすことが、仕事として大いばりでできるということに気づいたわけでありまして。

最初にご承知のグランドゴルフの用具に出会い、これが私の求めていたスポーツかもしれないと思ひましてやってみたのですが、どうも違っておりました。私の頭からはゴルフ場のあの緑、そしてボールを打った時のスカーツとした爽快感が消えず、そんな重い結局、公園に目を向けることになったわけでありまして。

北海道の場合、特に公園や緑地が多いのですが、せっかく整備をしても意外に利用度は低く、公園で遊ぶというよりは、閑散としていて公園が遊んでいる状況が見られます。また、「芝生に入るべからず」といった場所もあって親しめない。

でも公園はみんなのもの、特定の人や特定の世代に偏った利用であれば異論も出ると思ひましたが、みんなが楽しめるような使い方ならば、さほどの文句もなかるう、これこそ公園の活用ではないかと勝手な結論を出してしまったわけでありまして。万が一やめてしまうことがあっても、カップを取ってしまえば元の公園が無傷で残るだけ。これは公園に保険をかけているようなものでもあります。その時から、教育委員会という小さな枠を外し、全庁舎的な取り組みへと進むことになりました。

1本のクラブ、1個のボールなど基本的な用具のあり方は、グランドゴルフの素晴らしい発想にならう、というより、ほかに用具もありませんので、その用具を使って遊び方のアレンジからパークゴルフは出発したわけでありまして。

遊び方はあくまでゴルフです。そこで芝生にカップを埋めホールとしなければなりません。しかし何も無いところから始めなければなりません。思いついたのが直径20 $\phi$ の塩ビ管、これを輪切りにしてカップ替わりにしました。またホールに立てるピンや第1打目のボールを乗せるティなど、当時係わった教育委員会や町の職員による手作りで始めたものであります。

ただ、グランドゴルフのスティックやボールは、もともと遊び方の違いもありまして思い切り打つことによる傷みがひどく、やはり独自のものを開発しなければならなくなりまして、この時、私たちがやろうとしているものは幕別町オリジナルのスポーツなんだという意識を持つようになりまして。

その頃、昭和60年ではありますが、幕別町発祥のスポーツにふさわしい名前をつけようと声があがり、結局、公園の有効利用という発想を生かして「パークゴルフ」というネーミングに落ち着きました。以来、「パークゴルフ」に対する思い入れは、関係者をはじめ愛好者の中で高まる一方でありました。

幸い、町には日本で最初に操業を始めたベニヤ工場がありまして、その会社が用具の開発に取り組んでいただけたことも、パークゴルフ開発の大きな力となって今日に至ったものであります。

いろいろな人に体験してもらいましたが、「面白い」という評価を受け、これなら「子供からお年寄りまで」の三世代スポーツとして普及する価値はある、そんな確信を抱くところとなったわけでありまして。

もちろん、そのためにいくつかの約束事、ルールをつくりました。一つは1ホールの距離を100 $\phi$ 以内とすること。これはいろいろな角度から健闘をした結果であります。年齢差や男女差などのハンデとならない最低の条件になっております。二つにはクラブヘッドにロフト(角度)をつけないこと。これは、18ホールの面積が1.5 $\phi$ 程度に設定しましたので、そう広くないわけですから打球が飛び上がらないよう、つまり安全性への配慮をしたわけでありまして。

そうした約束ごとの中で、1ホール20 $\phi$ から100 $\phi$ 、18ホールの距離は800 $\phi$ 前後、またパー(標準打数)は66から72をコースの標準としました。もちろん9ホールを最小単位としております。

## パークゴルフの輪

4年目に入りまして、用具の開発もやがて市販できるところまで進みましたが、周辺の町村ではぼつぼつコースをつくるころが出始め、問い合わせや視察も増えてまいりました。ならば積極的に普及しようということになりまして、手始めに全道211市町村にパンフレットの発送をすることから活動を始め、さらに普及用のビデオの制作など、庁舎内にすでに設置されていた「パークゴルフ振興会議」が中心になって、いろんな知恵を出し合い普及活動が進められました。

普及の状況につきましては、概略資料のとおりであります。とくに北海道内は半数近い市町村がコースを造り、パークゴルフを楽しんでいます。また、愛好者の数も急速に増え続け、最近ではどんどん一人歩きをしている感がしています。

こうした経過をたどる中で、町には昭和61年にパークゴルフ協会が設立され、翌62年に入り話が大きくなりまして、外国人を交えた大会を開いてはということになり、受け皿として「国際パークゴルフ協会」を設立することになってしまいました。

8月に第1回の国際大会を開催したのですが、十勝に住む外国人約30人の参加もあって、私たち日本人を含め約180人参加の大会が盛大に催されました。競技終了後はジンギスカン・パーティーで賑やかに“ご近所サイズ”の国際交流をいたしました。以来5回の大会を開催しておりますが、私たちの取り組みには北海道知事も共鳴して、知事杯を出してくれるなど各方面の協賛をいただいているところであります。

また、国際協会では、パークゴルフの正しい発展をめざして、毎年「指導者養成事業」を行い、今まで355人の公認指導者、116人のアドバイザーの養成をしています。加盟団体も着実に増え続けていますし、外へ向かって非情によい方向へ進んでいるのではないかと考えております。

## パークゴルフ効果

また、テーマであります「まちづくり」という観点では、私たちは「パークゴルフ効果」という言葉で表現をしていますが、いろんな効果がありまして、これを要約すると大きく三つあるのではないかと分析しています。

一つ目は「人々のふれあい、コミュニケーションが非常によくなっている」ということです。

コースでは友だちが増えます。共通の話題ができます。人付き合いが悪いと云われた人が、いつの間にか輪に入っています。おじいちゃん、おばあちゃんが、得意になって孫の指導をしています。また、その逆もあります。いろんな大会が開かれています。

たとえば、町内会の親睦、職場やPTA、郵便局やスーパーなどの主催、変わったところでは野菜農家がトラック一杯の野菜を賞品にして、あるいは政治家の後援会の親睦などであります。

二つ目は「健康の増進」です。

私自身の運動不足解消は、申し上げたとおりであります。けれども精神衛生上の効果を疑いません。お母さん方も結構ストレスの解消をしているのではないのでしょうか。定年になったけど趣味がない、そこに町はパークゴルフという面白いものを始めてくれた。また、病み上がりの不自由な体も自然に良くなったというリハビリテーション、これはまだ分析ができていないのですが、国民健康保険の医療費の伸びが鈍くなっている。こんな現象が起きています。こうしたことから、高齢者の健康に関する意識調査を近く実施しようということになっています。コースからは笑い声が絶えません。そして、よく歩くということが心身の健康増進に効果を上げているのではないかと考えています。

三つ目は「地域経済に幅広い効果を上げている」ということです。

クラブやボールの販売はいうまでもありませんが、帽子や靴、ウェアなどのグッズがよく売れます。また、他のスポーツとは違い、一つとして同じコースがありません。したがって町を越えた愛好者の往来があります。そこで食べ物、飲物、車の燃料まで消費経済が活発になり、これが発展してパークゴルフツアーという観光にまで結びついてきています。また、町営の焼肉ガーデンに隣接した公園にコースを造ったところ、売上が急激に増加しました。

「パークゴルフ発祥のまち幕別町」というキャッチフレーズを商品や行事、名刺や封筒などいろんなところで使うようになり、自分たちの町を売り込もうとする意識が高まってきました。商工会も消費の流出を防ごうと、新たにスタンプ事業を始めましたが、パークゴルフのイメージを生かし、その名も「パークスタンプ」としました。パークゴルフ場の芝刈りなどで高齢者の就労機会が増えました。民間の温泉でもコースを設置して営業面でプラスになったなど、今後も幅広くその効果が期待されます。

申し上げましたことは、8年の間に表れた効果であります。まちづくりとは一体何であろうかと考えさせられます。大きな企業を誘致して町を潤すことは、だれも否定しません。幕別町も工業団地を造成したり、立地企業に優遇策を講ずるなど将来に向かって雇用の確保や財政の弾力的運営を図るため苦慮しているところです。

それはそれとして、町に住む人々にとって、この町に暮らすた

のしさ、住み良さというものが第一ではないでしょうか。事実、公園や河川敷の環境は整備され、終日賑わい、生き生きとして緑にとけこんでいる人たちを見る時、私たちは結果として町づくりの原点にふれたような気がしてなりません。

また、映像でもご紹介しましたように、寒い冬の過ごし方も課題であります。スケートやスキーをたのしむのは比較的若い人たちです。いろんな町で冬まつりの行事がもたれますが、幕別町では冬もみんなでたのしもうと、5年前から「全日本ミニスキージャンプ大会」を町民の手づくりによって催しています。

今年はその中で「雪中パークゴルフ」を初めてやってみることになりました。こんな試みも「面白そうなことは、どんどんやってみる」といった町民の心意気がそうさせるのではないかと思います。

## 将来の夢

限られた時間でありますので、充分意を尽くせなかったとは思いますが、パークゴルフの将来については、こんな夢を持っています。

「単純で面白い」。いわばスポーツの原点ではないかと思われるパークゴルフが国内はもとより、国境を越えて文字通り国際交流の架け橋となり、いろんな国の人々が共通の爽快感を味わう日は遠くない。その時は「パークゴルフサミット」でもやろうか。

そんな欲張った夢を申し上げ、また、これまで、それぞれの立場でご支援をくださった関係機関、マスコミのみなさん、日本レクリエーション協会、浦和市の日本ふるさと塾ほか多くの方々に感謝をしながら、私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。